

徒然なるままに…42

－生活科授業づくりから生かすこと－



平成28年6月7日
白鳥小学校 研修部

はじめに

早いもので、新年度が始まって、2か月が過ぎました。

春の運動会、皆さんお疲れ様でした。今年度の運動会では、いろいろな場面で、それぞれの思いや力を生かして活躍される先生方の姿をたくさん見せていただけた気がします。そんな先生方に支えられて、きっと、子どもたちも、一人一人の個性やよさを発揮して演技できたと思います。一人一人の持ち味を生かすのが、「白鳥らしさ」です。これからも、それぞれの持ち味で、様々に教育活動を展開したいと思います。



さて、先日は、広島大学大学院 朝倉淳先生に、生活科授業づくりについてお話いただきました。朝倉先生は、実践家から研究者になられた先生なので、理論に裏打ちされた授業づくりのテクニックとたくさんの引き出しからのアイデア満載の分かりやすいお話でした。

今回は、朝倉先生からご示唆いただいた生活科授業づくりと本校授業論とを関連させながら、授業づくりや活動展開の工夫についてまとめてみたいと思います。蛇足になるかもしれませんが、ご承知のことかもしれませんが、よかったら、お付き合いください。

1 子どもの思い・願いから始まる授業づくり

子どもの思い・願いとは、「してみたい。行ってみたい。」「調べたい。知りたい。」などといった、学習や活動に対する関心・意欲であり、知的な好奇心です。を示しています。そのもととなるのは、いつもお話している通り、子どもが発する疑問であり、それをもとに設定される「問い」です。子どもが矛盾や意外性、問題場面と出会うことによって、問いが発せられ、学びの必然性が生まれます。

とすると、子どもの思い・願いから始まる授業にするためには、問いと調べる必然性を生む活動を仕組むことが必要となると考えられます。見学・実験などの活動は、とにかく、調べる活動として位置付きますが、活動から問いに出会ったり、新たな思い・願いを膨らましたりする活動も大切です。具体的な手立てとして、次の3点を挙げてみましょう。一つ目は、一つの活動から、子どもがどこに目を向け、どんなことに気づき、つまずくかをできるだけ予想し、それを整理して新たな気づきに高める手立てや解決すべき問題場면을想定することです。

例えば、朝倉先生のお話にあった1学年「学校たんけん」の学習で、教師が保健室に冷蔵庫があることに気付くことを予想（期待）し、冷蔵庫に入っているものや保健室の先生の話などからの気づきを集約したり、「なぜ、保健室に冷蔵庫があるのだろう。」という問いを引き出したりして、保健室に冷蔵庫がある意味を考える手立てを用意してお

くのです。

二つ目は、見学などで考えられることですが、活動する際に、気付くことを期待したい内容について、「ここに、こんなものがある。他にもあるだろうか。」と着目点を示したり、「これは、何のためにあるのだろうか。」と具体的に問うたりして焦点化することです。

例えば、3学年社会科「ものを売る仕事」において、スーパーマーケットの見学をする際、「〇割引」のシールや「本日限りの特価」、「お一人様〇個まで」などの表示に着目させたり、「なぜ、〇個までなのかな。」、「なぜ、全部じゃないのかな。」などと問うたりして、集客と「限定」して値引きをすることの意味を考えさせようとするのです。

三つ目は、問いを発する資料提示です。資料に内在する矛盾点や意外性についての気付きから、子どもの疑問を喚起し、問いを設定することです。例えば、6学年社会科「世界に歩み出した日本」において、[資料1]のビゴーの「ノルマントン号事件」の風刺画を示し、ヨーロッパ人は、ボートに引き上げられているの



[資料1：ビゴーの風刺画]

に、日本人は、海に取り残されていること、船の上の人たちが笑みを浮かべていることなどの気付きから、「なぜ、日本は、欧米の国々から下に見られたのだろうか。」、「日本は、欧米の国々との不平等をどう乗り越えたのだろうか。」という問いを引き出すのです。

子どもの思い・願いから始まる授業づくりとは、子どもに学びの方向性を丸投げするのではなく、教師がそれを掘り起こし、高めていくことによって、子どもの主体的な学びを仕掛けることだと思えます。どんな活動・取組も、しなくてはならないからとして、一方的に子どもに下ろしたり、教師主導ですべてを決め、子どもをレールに乗せてしまったりしては、子どもの主体的な活動にはなりません。子どもの思い・願いから始めることによって、それらが主体的にできるのです。

2 「気付き」(→学び)を深める授業づくり

「気付き」(→学び)を深めるためには、次の2点が必要だと言えるでしょう。

1点目は、教師が具体的な手立てを講じながら、子どもの意見交流を意図的に組織することです。これが「アクティブ・ラーニング」です。

朝倉先生は、[資料2]のように、五つの「気付き」の深まりを挙げておられます。これらのように「気付き

- (1) 無自覚→「気付き」を自覚化する。
- (2) 静的な「気付き」→目的的な活動を誘発する「気付き」。
- (3) 個人レベルの「気付き」→集団で共有化する。
- (4) 一つの「気付き」→関連付ける。
- (5) 具体的な事象への「気付き」→一般化する。

[資料2：「気付き」の深まり]

」を深めるために、次のような意見交流・思考活動が考えられるでしょう。

互いの考えを「比較」し、違い(対比)やともに繰り返されていること(類比)を見出すことによって、(1),(3),(5)のような深まりを展開することができるでしょう。

他の意見を詳しくしたり、その先まで考えたりすること(「付け加え」)によって、(1),(2),(5)のような深まりを展開することができるでしょう。

ある考えを別の言葉に表現し直したり、別の側面から考え直したりすること(「言い換

え」、「関連」、「反論」によって、(2),(4),(5)のような深まりを展開することができるでしょう。

このような意見交流・思考活動を展開するためには、聞き分ける力や他の意見について考える力、それを表現する力といった、子どもの授業力が必要なのは、言うまでもないと思います。日々、事象から問いを見つけ、それについて調べ、考えたことを相互に練り上げる、探究活動を展開することによって、訓練することが必要だと考えられます。具体的には、授業を「創る」という意識付け、発言回数目標設定などといった、発言を促す取組や、意見のつなげ方の例示、つながった発言の指摘、つなげ方を絞った段階的な取組などといった、考えがつけられるようにするための手立てが考えられるでしょう。

2点目は、「気づき」(→学び)のベースになる仕組・概念を教師側が明確に持つておくことです。教師の意図なく、単に活動を展開し、闇雲に「気づき」を挙げさせるだけでは、学びにはなりません。

2学年生活科「みんなでいこうよ つかおうよ」では、「こども図書館」や「アストラムライン」などの公共施設を取り上げることになります。そこで、その施設の使い方やマナーとともに、設備やサービスから、「利用者のためのもの」に着目して取り上げ(「分類する」)、それらに共通している目的を見出すこと(「類比」)を通して、みんなで使う公共施設は、だれにとっても気持ちよく利用でき、生活に生かされているというように、公共施設を意味付け、「公共性」に気付くようにすることが必要だと考えられます。生活科は、「具体的な体験」(遊びではなく)とともに、根底に裏付けられる「科学性」が必要だと言われます。これが社会科や理科の学習とリンクしていくものと考えられます。ただ、これは、すべての授業においても同じことが言えると思います。教師は、科学性に基づく教材研究・解釈を行い、授業に対する意図とねらいを持って授業づくりをする必要があるのです。

終わりに

先生方の振り返りに対して返信しようと思いましたが、回を経るごとに長々となっている感があり、恐縮してしまいました。ここまでお付き合いありがとうございました。

今月27日から、いよいよ授業づくりの提案が始まります。教材の目新しさ以上に、この授業で、何がしたいのか、どんなことに気付かせ、感じさせ、伝えたいのかという授業のビジョンをはっきりと持って、教材構成してみてください。これまでの取組の成果を生かすばかりでなく、先生方お一人ずつの持ち味を生かしながら、新たな「挑戦」をしていきましょう。全国大会が終わった今年度だからこそです。

